

井上ひさしと近世のことば遊び

古 谷 由 美 子

一 はじめに

井上ひさし作品『天保十二年のシェイクスピア』を鑑賞していて気が付くのは、ことば遊びの多さだ。口上にはじまり劇中歌、登場人物たちの台詞、ナレーションに至るまで、しゃれが数多く用いられている。ここでは『天保十二年のシェイクスピア』にみられるしゃれから、近世文化のことば遊びに注目したい。

二 『天保十二年のシェイクスピア』とは

戯曲『天保十二年のシェイクスピア』は、一九七三年十二月、新潮社の新作戯曲シリーズ『書下ろし新潮劇場』として刊行。一九七四年一月五日から二月三日までの三十日間、東京西部劇場にて初演された。

舞台は天保時代、下総国鳴滝村の宿場。二軒の旅籠を経営する侠客の、跡目争いを描く。ストーリーにはシェイクスピアの戯曲三十七作品、すべてが織り込まれている。財産分与の際、父親をどれだけ愛しているかを娘たちに語らせる部分は『リア王』。敵同士でありながら恋に落ちる男女は『ロミオとジュリエット』。謀殺された父の霊に出会う『ハムレット』の場面もある。主要部分に何度も使われる話があれば、台詞の一言に引用されて終わる作品もある。

また舞台の設定には、宝井琴凌の『天保水滸伝』が意識されている。

これは侠客講談で、下総一帯の利権をめぐる笹川繁蔵と飯岡助五郎の勢力争いの物語だ。二人の親分は劇中、敵対する姉妹それぞれの後ろ盾として登場してくる。

三 近世のことば遊び

日本語のことば遊びといえば「しゃれ」である。同音異義語や音の似た語を使った言葉の掛け合わせだ。言葉に複数の意味を持たせ、その違いを楽しむ。昨年扱った叩き売りの口上も、しゃれを交えたユニークなものだった。

しゃれは近世の大衆文化には欠かせない。狂歌や初期俳諧、戯作、都逸など。とくに落語はしゃれがつまった話芸だ。「細工は棟梁（流々）、調べ（仕上げ）をご覧じろ」（『大工調べ』）といったサゲがしゃれという地口落ちというジャンルもある。名前自体がしゃれになった噺家もあるほどだ。「三笑亭可楽（さんしょうていからく）」などは「山椒辛い」をもじったもの。

またしゃれから派生した無駄口もよくみられる。無駄口とは、言葉の後ろに文句を付け足し茶化すもの。「その手はくわれないぞ」を「その手は桑名の焼き蛤」（十返舎一九『続々膝栗毛』）、「ありがたい」を「有難山のとんび鳥」（恋川春町『金々先生栄華夢』）と言うのだ。この無駄口は「ちったあ似たか（二鷹）、三なすび」（『暫』）と歌舞伎にもでてくる。

先行作品の言葉をもじれば、しゃれはパロディとなる。「芥河」(『伊勢物語』の「白玉か何ぞ」を「味噌玉か、何ぞ」と言い換えた『好色一代男』は、話の内容自体「芥河」のパロディでもある。

それでは、井上作品にはどのようなしゃれが登場するのだろうか。劇中の口上、「ぼろづくし雑巾口上」を紹介しよう。

「ぼろづくし雑巾口上」

この足袋(度)はー

皆々様には、正月公演カジュアル(数ある)なかから、この西武劇場へ腰巻(お越し)くださいまして、錦紗(きんしゃ・感謝)感激霜降り雨あられ、心より御礼モスリン(申し)あげます。

繻子(サテン・さて)、新劇界はこのところ猫も杓子もシェイクスピア、紗(沙)翁なしでは夜も明けぬ賑々しき賑わい。それはそれでむろん結構なコート(こと)なれど、天鵝絨(ビロード・玄人)ならぬどしろーとの麻(浅)智恵を申せば、これまでの日本の沙翁劇は僅かの例を除いて、じつに奇っ怪、まことに面妖。シェイクスピアの思想はこうでござい、ハムレットの哲学はどうでございと、スリッパ(立派)な学者先生がたの御高説の受け売り、おかげで肝腎の舞台はちつとも弾まず、失礼ながらひっくりかえったマントでトンマなはなし、こんなことは決して正しくナイロンのパンスト(ない)。

手拭の長さは三尺、その三尺手拭ほども高い舞台の上から皆々様の袖捕まえて、釈迦に説法は畏れ多いことながら、小むずかしきシェイクスピア劇は悪い腹掛け心掛け、たとえば、花の顔容に

ヴェールをかぶせ、熟れた唇に猿ぐつわをかませ、すんなり伸びた脚におしめをはかせ、張り出した乳房をよだれかけで隠す心ない仕打ち、大袈裟に言えば胴着(道義)上の大問題。

シェイクスピア劇はまず豪華金襴(きんらん・絢爛)、波瀾万丈、法服(抱腹)絶倒、陰々滅々の水着わ(水際)立った筋立ての面白さを娛しみ、呼べば答え、答えれば返し、返さばまた呼ぶコトバの響きの玄妙さにとつぷりと軀を浸すことが第一。哲学や思想の出番はその次のこと。シェイクスピア自身も申しております。「哲学でジュリエットが作れるものか」と。

むろんこんなことは皆々様もちゃんこと(ちゃんと)先刻ごショーツ(御承知)のこと、長口上と長禪はいらいらの因、青臭い小理屈はこころで切り上げ、これよりお目にかけますは、シェイクスピアの全作品の、あつちを緋(かすり)、こつちを掻取り、そしてそつちを打裂羽織(ぶつさき)にしたものを縦糸に、弱きを襷(たすき・助け)、強きを扱帯(しごき)、利根の川風袂に入れたる長緞子(どんす・ドス)者の喧嘩を横糸に、たがいに紬(紡ぎ)、たがいに給(合わせ)、一反に繋いだ普段着のシェイクスピア劇。題しまして、

『天保十二年のシェイクスピア』

……もつとも普段着とはよく言えはなし、その有体はシェイクスピアという立派な反物の余り布や切れっ端を継ぎ合わせ寄せ集めた雑巾仕立て。雑巾仕立ての芝居ゆえ、この口上も「ぼろづくし雑巾口上」と名付けましたが、それはとにかく盲蝮蛇(もうしまへび・申しません)に怖じざる大風呂敷の、これは襦袢(どてらい・ど偉い)試みなのレース(です)。

これは芸術のアロハならぬイロハなれど、偉大な芸術作品にはきつと、人間への深い洞察と、浴衣な、いやゆたかな通俗性が同居しております。この芝居はシェイクスピアの通俗性、すなわち都合主義の筋立て、登場人物たちのお道化た股引、ではない達引、糸し（愛し）恋しの派手な色模様、そして絹を裂くような悲鳴や陰謀、それから語紹（語呂）合わせなどをつめこんだいわばシェイクスピアの通俗性の見本市。

通俗に低級を重ね、通俗に卑俗を合わせるうちに、シェイクスピアの偉大さの本敷布（シート、本質）が、その片鱗がハンカチほどでも顔を出さば望外の仕合せ。

猿又（さるまた・さてまた）、シェイクスピアのコマ切れをネタに下らぬ芝居をでっち上げるは大文豪への冒涇ジャンパー（なのは）、とおっしゃる方もあるかと思いますが、しかし、そのシェイクスピアが剽窃の大家であったことも周知の事実、シェイクスピアをネタにする、このことがすでにシェイクスピア式なのでございます。

さあれ、シェイクスピアをつまらなく演ずるという悪いお仕着せから結城（勇氣）を出して脱脂綿（脱して）、命尽きてタオル（倒れる）まで、おもしろきものをがわれらの合言葉。そこでソプラノ（ソプラノ）あればガーゼ（カゼ）声あり、歌あれば踊りありのミュージカル仕立て、上下にわけて間に休憩をはさんだ一晚芝居。狙い通りパッチと（バチツと）極つてスカート（スマート）に行くか、あてごとと禪は向こうから外れるという諺どおりになるかは紙子（神）のみぞ知ることなれど、智慧と涙とアセテート（汗と）をふり絞り染めの（ふり絞り）、ない袖を振る苦しき外套、うんにゃ

芸当、思わぬ方へスリップし脱線しましても、正月のめでたき晴れの羽二重（はぶたえ・初舞台）ゆえ、笑ってお見逃しくださいますよう、そしてなにとぞ最後までごゆるりとご観劇くださいますよう、出演者一同、合羽（かつば・がばつ）と伏して単衣（一重）に願い奉てまつウール（うる）。

リズムカルな口上に、これでもかとしやれが散りばめられている。中には「正しくナイロンのパンスト」といった無駄口も。しやれは衣類など、すべて布に関係したものになっている。

このように、似たもの・関連する言葉を集め作った文章を「吹寄せ」という。口上は布づくしの吹寄せなのである。近松門左衛門の浄瑠璃には、冒頭部分に吹寄せが多用される。「女殺油地獄」では油づくし、「長町女腹切」では刀づくしというように。関連する語を繋げることで、流れるような語りになる。

四 まとめ

意外な言葉を連想した面白さと語呂良いリズム。『天保十二年のシェイクスピア』近世文化の流れを汲んだものである。

参考文献

- 『井上ひさし全芝居 その二』（井上ひさし、新潮社、一九八四年）
- 『パロディ志願 エッセイ集二』（井上ひさし、中央公論社、一九七九年）
- 『井上ひさしコレクション ことばの巻』（井上ひさし、岩波書店、二〇〇五年）
- 『ことば遊びの文学史』（小野恭靖、新典社、一九九九年）